

安全データシート

ギ酸

作成年月日：2025年4月1日

1. 化学品及び会社概要

化学品等の名称	ギ酸
供給者の会社名	コーキン化学株式会社
住所	大阪府東大阪市中石切町 3 - 7 - 49
電話番号	072-988-2300
FAX 番号	072-988-2506
電子メールアドレス	yakuji@kohkin.co.jp
推奨用途及び使用上の制限	飼料添加物

2. 危険有害性の要約

GHS 分類

物理化学的危険性	爆発物	区分に該当しない
	可燃性ガス	区分に該当しない
	エアゾール	区分に該当しない
	酸化性ガス	区分に該当しない
	高压ガス	区分に該当しない
	引火性液体	区分 3
	可燃性固体	区分に該当しない
	自己反応性化学品	区分に該当しない
	自然発火性液体	区分に該当しない
	自然発火性固体	区分に該当しない
	自己発熱性化学品	分類できない
	水反応可燃性化学品	区分に該当しない
	酸化性液体	区分に該当しない
	酸化性固体	区分に該当しない
	有機過酸化物	区分に該当しない
	金属腐食性化学品	分類できない
	鈍性化爆発物	分類できない
健康に対する有害性	急性毒性（経口）	区分 4
	急性毒性（経皮）	分類できない
	急性毒性（吸入：ガス）	区分に該当しない
	急性毒性（吸入：蒸気）	区分 4

	急性毒性（吸入：粉じん、ミスト）	分類できない
	皮膚腐食性 / 刺激性	区分 1
	眼に対する重篤な損傷 / 眼刺激性	区分 1
	呼吸器感作性	分類できない
	皮膚感作性	区分に該当しない
	生殖細胞変異原性	分類できない
	発がん性	区分に該当しない
	生殖毒性	分類できない
	特定標的臓器毒性（単回ばく露）	区分 1（中枢神経系、呼吸器、血液系、腎臓）
	特定標的臓器毒性（反復ばく露）	区分 2（呼吸器）
	誤えん有害性	分類できない
環境に対する有害性	水生環境有害性 短期（急性）	区分 3
	水生環境有害性 長期（慢性）	区分に該当しない
	オゾン層への有害性	分類できない

ラベル要素

絵表示(ピクトグラム)



注意喚起語

危険

危険有害性情報

引火性液体及び蒸気
 飲み込んだ場合や吸入した場合は有害
 重篤な皮膚の薬傷及び眼の損傷
 中枢神経系、呼吸器、血液系、腎臓の障害
 長期または反復ばく露による呼吸器の障害のおそれ
 水生生物に有害

注意書き

【安全対策】
 熱、高温のもの、火花、裸火及び他の着火源から遠ざけること。
 禁煙。
 容器を密閉しておくこと。
 容器を接地しアースをとること。
 防爆型の電気機器 / 換気装置 / 照明機器を使用すること。
 火花を発生させない工具を使用すること。
 静電気放電に対する措置を講ずること。
 保護手袋、保護衣、保護眼鏡、保護面マスクを着用すること。

取扱い後は手をよく洗うこと。

この製品を使用するときに、飲食又は喫煙をしないこと。

屋外又は換気の良い場所でだけ使用すること。

粉じん、煙、ガス、ミスト、蒸気、スプレーを吸入しないこと。

環境への放出を避けること。

【応急措置】

皮膚又は髪に付着した場合、直ちに汚染された衣類を全て脱ぐこと。皮膚を水又はシャワーで洗うこと。

火災の場合：消火するために適切な消火剤を使用すること。

飲み込んだ場合、口をすすぐこと。無理に吐かせないこと。気分が悪いときは医師に連絡すること。

吸入した場合、空気の新鮮な場所に移し、呼吸しやすい姿勢で休息させること。

汚染された衣類を再使用する場合には洗濯をすること。

直ちに医師に連絡すること。

眼に入った場合、水で数分間注意深く洗うこと。次にコンタクトレンズを着用していて容易に外せる場合は外すこと。その後も洗浄を続けること。直ちに医師に連絡すること。

ばく露又はばく露の懸念がある場合、医師に連絡すること。

気分が悪いときは、医師の診察ノ手当てを受けること。

【保管】

換気の良い場所で保管すること。涼しいところに置くこと。

容器を密閉しておくこと。施錠して保管することが望ましい。

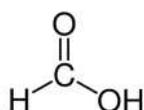
【廃棄】

内容物、容器を都道府県知事の許可を受けた専門の廃棄物処理業者に委託すること。

3. 組成及び成分情報

化学物質・混合物の区別	化学物質
化学名又は一般名	ギ酸 (Formic acid)
別名	情報なし
濃度又は濃度範囲	98.0%以上
化学式 (分子量)	CH ₂ O ₂ (46.03)

化学特性 (示性式又は構造式)



CAS 登録番号 (CAS RN) 64-18-6
 官報公示整理番号(化審法) (2)-670
 官報公示整理番号(安衛法)
 化管法指定化学物質の種別
 分類に寄与する不純物及び安定化添加物 情報なし

4. 応急措置

吸入した場合	新鮮な空気のある場所に移動させる。呼吸困難な場合は半座位の姿勢にさせるか、酸素吸入をさせる。できるだけ早く、グルココルチコイド吸入用スプレーで繰り返し深呼吸させる。迅速に医師の診察/手当てを受けること。
皮膚に付着した場合	汚染された衣服を脱がせる。皮膚に付着した部分を流水で 10～20 分間洗浄する。医師の診察を受けること。
眼に入った場合	できるだけ早く、流水で 10 分間洗浄する。コンタクトレンズを着用していて容易に外せる場合は外し、洗浄を続ける。酸の除去のために緩やかな流水を眼に当てる。搬送中も生理食塩水か水で洗浄を続けること。医師の診察/手当てを受けること。
飲み込んだ場合	口をすすぐ。コップ一杯の水(約 200mL)を飲ませる。無理に吐かせない。医師の診察、手当てを受けること。
急性症状及び遅発性症状の最も重要な徴候症状	<p>吸入：チクチクする、鼻の焼けるような痛み、鼻水、咳、喉頭の刺激、場合によっては反射性条件付き呼吸抑制、過敏な人の場合は喘息状愁訴、大量の吸入後(約 30ppm 以上)は喉頭/喉頭浮腫または痙攣、肺浮腫、肺炎の恐れ。</p> <p>皮膚：蒸気の場合は火傷、紅斑、水疱。10%以上の液体の場合は腐食(火傷、紅斑、水腫、水疱、壊死、潰瘍)。</p> <p>眼：蒸気の場合は灼熱感、射出、瞼痙攣、流涙、結膜炎、瞼浮腫、角膜炎。液体の場合は急激な角膜の混濁、虹彩炎、また瞼球癒着。</p> <p>経口摂取：希釈された酸(例えば 1%溶液)であっても飲み込むと、負傷者は生命を失う危険がある。痛みを伴う化学熱傷。口、喉(声門浮腫)、食道、胃(穿孔の危険性)、胃内出血、心臓/循環器反応、虚脱またはショック、反射条件付き心停止、肝臓と心臓に虚血性障害、遅延後の損傷としてしばしば食道狭窄が発生する。</p> <p>吸収：中枢神経系抑制(意識不明)、酸性血症、溶血、出血、腎臓の機能障害または腎不全。</p>
応急措置をする者の保護に必要な注意情報	情報なし

医師に対する特別注意事項 情報なし

5. 火災時の措置

適切な消火剤	水噴霧、粉末消火薬剤、泡消火薬剤、二酸化炭素
使ってはならない消火剤	棒状注水
特有の危険有害性	火災の場合、有害物質（一酸化炭素、二酸化炭素）が放出される可能性がある。
特有の消火方法	周囲の容器を水スプレーで冷却する。可能であれば、容器を危険区域外に持ち出す。加熱により圧力が上昇し破裂する恐れがある。着火源となるものを遮断する。バックファイヤーに注意する。水スプレーで蒸気を封じ込める。
消火を行う者の保護	消火作業の際は、適切な自給式の呼吸器用保護具、眼や皮膚を保護する防護服（耐熱性）を着用する。

6. 漏出時の措置

人体に対する注意事項、保護具及び緊急時措置	全ての着火源を断つ。周囲に注意喚起し、避難させる。漏出区域に入るときは保護具を着用すること。
環境に対する注意事項	水域に対する危険性は低い。非常に多量に水、排水、下水、または地中に入った場合は、自治体に連絡する。
封じ込め及び浄化の方法及び機材	こぼれた液体を吸収剤（例：珪藻土、パーミキュライト、砂）で吸収し、規則に従って廃棄する。火花の出ない器具を使用する。その後、換気し、漏出した場所を洗浄する。
二次災害の防止策	付近の着火源となるものを速やかに除くとともに消火剤を準備する。 火花を発生しない安全な用具を使用する。

7. 取扱い及び保管上の注意

取扱い	
技術的対策	『8. ばく露防止及び保護措置』に記載の設備対策を行い、保護具を着用する。
安全取扱い注意事項	容器を開けたままにしない。容器を接地しアースを取る。飛沫を避ける。接触を避ける。圧縮空気で輸送してはならない。使用時は十分な換気を行うこと。 機器類は防爆構造とし、設備は静電気対策を実施する。周辺での高温物、スパーク、火気の使用を禁止する。 静電気放電に対する予防措置を講ずること。
接触回避	『10. 安定性及び反応性』を参照。

衛生対策	皮膚や眼への接触を避ける。接触した場合は洗浄する。蒸気またはミストの吸入を避ける。休憩前や作業終了時には石鹼と水で皮膚を洗い、洗浄後は脂肪分の多いスキンケア製品を塗布する。使用するときには飲食、喫煙をしないこと。
保管	
安全な保管条件	施錠して保管することが望ましい。容器を密閉して涼しくて乾燥した換気の良い場所に保管する。分解により発生する過圧に注意する。着火源、熱源、強酸化剤、強塩基、強酸から離しておく。
安全な容器包装材料	消防法、毒劇法及び国連輸送法規で規定されている容器を使用する。

8. ばく露防止及び保護措置

管理濃度	未設定
許容濃度	
ACGIH / TLV-TWA	TLV-TWA : 5 ppm TLV-STEL : 10 ppm
日本産業衛生学会	5 ppm、9.4 mg/m ³
設備対策	作業場所には適切な局所排気装置等を設置する。取り扱い場所の近くに洗眼及び身体洗浄のための設備を設ける。
保護具	
呼吸器の保護具	緊急時（例：意図しない物質の放出、ばく露限界値を超える場合）には、呼吸保護具を着用する。 状況に応じた適切な呼吸用保護具を使用する。 防毒マスクの選択については、以下の点に留意する。 -防毒マスクは、日本工業規格(JIS T8152)に適合した、作業に適した性能及び構造のものを選ぶ。その際、取扱説明書等に記載されているデータを参考にする。 -作業者が粉じんにはばく露される環境で防毒マスクを使用する場合には、防じん機能付き吸収缶を使用する -酸素濃度が 18%未満の場所では使用しない。
手の保護具	保護手袋を着用する。10%ギ酸の場合は天然ゴム、クロロプレン、ブチルゴム、フッ素ゴム、PVC が適している。ニトリルゴムは適さない。50%ギ酸の場合はクロロプレン、ブチルゴム、フッ素ゴムが適している。4 時間未満では天然ゴム、PVC も可。ニトリルゴムは適さない。98%ギ酸の場合はクロロプレン、ブチルゴム、フッ素ゴムが適している。2 時間未満では PVC も可。1 時間未満では天然ゴムも可。ニトリルゴムは適さない。
眼の保護具	化学用安全ゴーグルを着用する。顔面が危険な場合は、保護シ

ールドも着用する。目を傷める可能性のある蒸気やエアロゾルが発生した場合、全面マスクを着用すること。

皮膚及び身体の保護具 必要に応じて十分な長さのエプロンと長靴、または化学防護服を着用する。

9. 物理的及び化学的性質

物理的状态：物理状态	液体 (20 °C、1 気圧)
：色	無色
：臭い	刺激臭
融点・凝固点	8 °C (GESTIS(2022), ICSC(2018))
沸点又は初留点及び沸騰範囲	101 °C (GESTIS(2022), ICSC(2018))
可燃性	データなし
爆発下限界及び爆発上限界 / 可燃限界	10 ~ 45.5 vol.% (GESTIS(2022)) 18 ~ 51 vol.% (ICSC(2018))
引火点	45 °C (Closed cup) (GESTIS(2022)) 69 °C (ICSC(2018))
自然発火点	520 °C (GESTIS(2022), ICSC(2018))
分解温度	データなし
pH	2.2 (GESTIS(2022))
動粘性率	1.8 mPa*s (20 °C) (GESTIS(2022))
溶解度	水、エタノール、アセトン又はエーテルと混和する。
n-オクタノール/水分配係数	log Kow: -0.54 (GESTIS(2022), ICSC(2018))
蒸気圧	44.6 hPa (20 °C) (GESTIS(2022)) 4.6 kPa (20 °C) (ICSC(2018))
密度及び / 又は相対密度	1.22 g/cm ³ (20 °C) (GESTIS(2022)) 1.2 (ICSC(2018))
相対ガス密度	1.59 (GESTIS(2022)) 1.6 (ICSC(2018))
粒子特性	データなし

10. 安定性及び反応性

反応性	『危険有害反応可能性』の項を参照。
化学的安定性	情報なし
危険有害反応可能性	69 以上では、蒸気/空気の爆発性混合気体を生じることがある。加熱すると分解。室温では、一酸化炭素の放出を伴うゆっくりとした明確な分解が起こる。加熱や強酸との接触により、分解する。一酸化炭素を生じる。本物質は、中程度の強酸。酸

避けるべき条件	化剤と激しく反応する。強塩基と激しく反応する。火災や爆発の危険を生じる。多くのプラスチックおよび金属類を侵す。
混触危険物質	火気、加熱、高温、静電気、爆発性混合気の形成。 過酸化水素、フルフリルアルコール、次亜塩素酸ナトリウム（熱）、ニッケル触媒、ニトロメタン、アルミニウム、酸化剤、硝酸。硫酸、水酸化アルカリ（濃）、アルカリ土類水酸化物（濃）、パラジウム-炭素、五酸化リン、三硝酸タリウム三水和物
危険有害な分解生成物	一酸化炭素

11. 有害性情報

急性毒性

経口

ラットの LD₅₀ 値として、700mg/kg (PATTY (6th, 2012)、SIDS (2011))、1,100mg/kg (環境省リスク評価第 6 巻：暫定的有害性評価シート (2008))、1,830mg/kg (PATTY (6th, 2012))、730-1,830mg/kg (DFGOT vol. 19 (2003))、1,100-1,850mg/kg (NTP TR19 (1992)) との報告に基づき、区分 4 とした。

経皮

データ不足のため分類できない。

吸入：ガス

GHS の定義における液体であるため区分に該当しない。

吸入：蒸気

下記の(1)より、区分4とした。なお、ばく露濃度は飽和蒸気圧濃度の90%(37,946 ppm)より低いため、蒸気と判断し、ppmV を単位とする基準値より判断した。

(1)ラットのLC₅₀: 7.4mg/L(3,936 ppm)(OECD TG 403)(CLH report (2021)、DFG MAK (2003)、EFSA (2014)、SIDS dossier (2008)、REACH登録情報 (Accessed Oct. 2022))

【参考データ等】

(2)本物質はEU CLHにおいて、(1)のデータに基づき、mg/L の単位を用いて、区分3に分類されている。

吸入：粉じん、ミスト
皮膚腐食性 / 刺激性

データ不足のため分類できない。

下記の(1)、(2)より、区分1とした。なお、旧分類結果がCLP 分類と異なることから本項目を見直したが、分類結果に変更はない(2022年度)。

(1)ウサギを用いた皮膚刺激性試験において、皮膚腐食性または刺激性がみられた(DFG MAK (2003))。

(2)本物質は皮膚腐食性又は刺激苛性を示すとの多数の報告がある(MOE 初期評価暫定的有害性評価シート (2008)、SIDS (2011)、NTP TR 19 (1992))。

【参考データ等】

(3)EUではSkin Corr. 1Aに分類されている(CLP分類結果

	(Accessed Oct. 2022))。
眼に対する重篤な損傷 / 眼刺激性	ウサギを用いた眼刺激性試験において、刺激性あるいは腐食性がみられたとの報告 (SIDS (2011)、DFGOT vol. 19 (2003))、角膜に熱傷が生じたとの報告 (PATTY (6th, 2012)) がある。また、ヒトの眼に対して強い腐食性を示すとの記載が多数あり (SIDS (2011)、NTP TR19 (1992))、結膜炎や角膜炎を生じ、回復性のない傷害を残すとの記載がある (PATTY (6th, 2012))。以上の結果から区分1とした。なお本物質はpH = 2.2 (at 10g/L, 20) (IUCLID (2000)) である
呼吸器感作性	データ不足のため分類できない。
皮膚感作性	モルモットを用いたビューラー試験 (OECD TG406、GLP 適合) において、感作誘発後、全投与群 20 匹に皮膚反応はみられず陰性であった (SIDS (2011)) との結果から、区分に該当しない (区分外) とした。
生殖細胞変異原性	データ不足のため分類できない。すなわち、in vivo のデータはなく、in vitro では、細菌の復帰突然変異試験、哺乳類培養細胞の遺伝子突然変異試験、染色体異常試験、ヒトリンパ球及び哺乳類培養細胞の姉妹染色分体交換試験でいずれも陰性であると結論されている (SIDS (2011)、PATTY (6th, 2012)、IUCLID (2000)、NTP DB (Access on July 2014)、DFGOT vol. 19 (2003))。
発がん性	国際機関等による分類はない。個別の情報としては、ギ酸カリウムの2,000mg/kg/dayまでの用量で、ラット、マウス (ともに雌雄) に2年間 (ラット : 104週間、マウス : 80週間) 混餌投与した発がん性試験 (OECD TG 453と比較可能) の結果は陰性 (SIDS (2011)) である。また、ギ酸カルシウムの150-200mg/kg/dayで雌雄ラットに1.5年間飲水投与した試験 (試験条件が不十分との記載有り) で陰性 (BUA 81 (1995)) である。以上より、ラット、マウスの発がん性試験でいずれも陰性であることから、区分に該当しない (区分外) とした。
生殖毒性	ラットを用いた経口経路 (飲水) での多世代生殖毒性試験において出生児の体重や体長に影響はなかったとの報告 (環境省リスク評価第6巻 : 暫定的有害性評価シート (2008)、DFGOT vol. 19 (2003)) があるが1用量の試験であり評価するには情報が不十分である。また、ラットを用い7ヵ月まで1.0%の飲水投与により、児の生存率が50-67%低下したとの報告 (NTP TR19 (1992)) があるが、試験法及び結果についてそれ以上の具体的な記述がない。マウスを用いた経口経路 (強制) での催奇形性試験において、妊娠10日及び18日の検査において胎児の神経管欠損に影響はみら

れていない (PATTY (6th, 2012)、環境省リスク評価第6巻：暫定的有害性評価シート (2008)、DFGOT vol. 19 (2003))。この試験は、メタノールが誘発する外脳症機序をギ酸ナトリウムで調べる目的であり、投与期間がメタノールの外脳症の感受期である妊娠8日のみに限定した試験であることから、外脳症以外の催奇形性については十分な情報でないと考えられる。

以上のように、生殖毒性 (生殖能、催奇形性) に関する十分な情報がないことから分類できないとした。

特定標的臓器毒性 (単回ばく露)

本物質は、腐食性が強く、口、喉、食道、胃粘膜に対して傷害を引き起こす (NTP TR19 (1992))。

ヒトにおいては、経口摂取で、咽頭痛、灼熱感、腹痛、胃痙攣、嘔吐、鼻・喉頭及び胃腸管粘膜の充血、浮腫及び壊死、食道狭窄、胃穿孔、胃腸管出血、その他、嚥下困難、意識喪失、中枢神経系抑制、重篤なアシドーシス、溶血、血尿、血液凝固障害、無尿、尿毒症、急性腎不全、腎症、肝障害、血管ショック、循環器不全、肺炎、死亡が報告されている (環境省リスク評価第6巻：暫定的有害性評価シート (2008)、ACGIH (7th, 2001)、PATTY (6th, 2012)、BUA 81 (1995)、DFGOT vol. 19 (2003)、NTP TR19 (1992))。蒸気の吸入ばく露では、咽頭痛、咳、灼熱感、息苦しさ、意識喪失、鼻炎、気管支炎、呼吸困難、呼吸器不全、肺水腫、アシドーシス、急性腎不全、死亡がみられている (NTP TR19 (1992)、環境省リスク評価第6巻：暫定的有害性評価シート (2008))。経皮ばく露では、熱いギ酸を顔に誤ってかけた作業場で、顕著な嚥下困難及び呼吸困難により6時間後に死亡 (ACGIH (7th, 2001))、3歳の少女が全身皮膚の35%以上をばく露した事故で、火傷、重篤なアシドーシスが報告されている (PATTY (6th, 2012))。その他、ばく露経路は記載されていないが、大量ばく露で視力障害、精神障害を含む中枢神経抑制 (PATTY (6th, 2012))、本物質の保存液にばく露された農夫では、重篤な循環器疾患及び腎臓疾患を生じた (PATTY (6th, 2012)) との報告がある。

実験動物では、ラットの経口投与で、円背位、呼吸困難、鼻血、血尿、低体温、病理検査で、胃、肝臓、腎臓の充血、ラットの吸入ばく露で、流涎、痛みの反射消失、呼吸困難、呼吸音、鼓腸、無気力、円背位姿勢、不安定歩行がみられている (SIDS (2011))。これらの所見は、区分1に相当するガイダンス値の範囲であった。

以上より、区分1 (中枢神経系、呼吸器、血液系、腎臓) とした

特定標的臓器毒性（反復ばく露）	ヒトでの本物質反復ばく露による影響に関する情報はない。実験動物ではラット及びマウスに本物質蒸気を13週間吸入ばく露した試験において、標的臓器を特定可能な全身影響は認められなかったが、局所影響としてマウスでは区分1 (0.12 mg/L/6hr)、ラットでは区分2 (0.24 mg/L/6hr) に該当する濃度で、嗅上皮の変性 (ラット、マウス)、呼吸上皮の扁平化生 (ラット) がみられた (SIDS (2011)、NTP TR19 (1992)、DFGOT vol. 19 (2003)、PATTY (6th, 2012))。ヒトでの吸入ばく露による影響が不明であるため、ラット、マウスの両動物種で呼吸器への影響が共通に認められた濃度区分より、区分2 (呼吸器) に分類した。
誤えん有害性	データ不足のため分類できない。

12. 環境影響情報

水生環境有害性 短期（急性）	藻類（セネデスムス）での 96 時間 $EC_{50} = 25\text{mg/L}$ (HSDB, 2009) であることから、区分3とした。
水生環境有害性 長期（慢性）	信頼性のある慢性毒性データが得られていない。急性毒性は本物質の酸で実施された試験結果で分類したが、慢性毒性については塩のデータを用いて分類する。カリウム塩を用いた藻類生長阻害試験 (スケルトネマを用いた 72 時間 $ErC > 1000\text{mg/L}$)、甲殻類急性遊泳阻害試験 (オオミジンコを用いた 48 時間 $EC_{50} = 540\text{mg/L}$)、魚類急性毒性試験 (ゼブラフィッシュを用いた 96 時間 $LC_{50} = 1560\text{mg/L}$) においては、いずれも区分外相当 (SIDS, 2011) であり、ギ酸 (水溶解度 = 1000000mg/L 、PHYSROP Database 2009) 及びギ酸カルシウム (水溶解度 = $16\text{g}/100\text{mL}$ 、ICSC, 2006) とともに難水溶性ではないことから、区分外とした。
オゾン層への有害性	当該物質はモントリオール議定書の附属書に列記されていない。
残留性・分解性	化審法分解度試験：良分解性 (化学物質安全性点検結果等 (分解性・蓄積性))
生態蓄積性	データなし
土壤中の移動性	データなし

13. 廃棄上の注意

残余廃棄物	廃棄においては、関連法規ならびに地方自治体の基準に従うこと。都道府県知事などの許可を受けた産業廃棄物処理業者、もしくは地方公共団体がその処理を行っている場合にはそこに委託して処理する。
-------	--

汚染容器及び包装
 廃棄物の処理を委託する場合、処理業者等に危険性、有害性を十分告知の上処理を委託する。
 容器は清浄にしてリサイクルするか、関連法規並びに地方自治体の基準に従って適切な処分を行う。
 空容器を廃棄する場合は、内容物を完全に除去すること。

14. 輸送上の注意

国際規則

国連番号 1779 (濃度が 85 質量%を超えるもの)
 3412 (濃度が 5 質量%以上 85 質量%以下のもの)
 3412 (濃度が 5 質量%以上 10 質量%未満のもの)
 品名 (国連輸送名) ギ酸
 国連分類 (輸送における危険有害性クラス) 8 (濃度が 10 質量%以上のもの)
 副次危険 3 (濃度が 85 質量%を超えるもの)
 容器等級 (濃度が 10 質量%以上のもの)
 (濃度が 5 質量%以上 10 質量%未満のもの)

海洋汚染物質 該当しない

MARPOL73/78附属書 該当しない

及びIBCコードによるばら積み輸送される液体物質

国内規制

海上規制情報 船舶安全法の規定に従う。

航空規制情報 航空法の規定に従う。

陸上規制情報 道路法、消防法、毒物及び劇物取締法の規定に従う。

特別な安全上の対策 道路法、消防法、毒物及び劇物取締法の規定によるイエローカード携行の対象物

その他 (一般的) 注意 輸送に際しては、直射日光を避け、容器の破損、腐食、漏れのないように積み込み、荷崩れの防止を確実にを行う。
 重量物を上積みしない。

緊急時応急措置指針番号 153

15. 適用法令

化学物質排出把握管理促進法 (PRTR 法) 該当しない

労働安全衛生法 名称等を表示すべき危険有害物 (1%)
 名称等を通知すべき危険有害物 (1%)

	皮膚刺激性有害物質 (> 1%)
	危険物・引火性の物 (施行令別表第1第4号)
	作業場内表示義務 (法第101条の4)
化審法	優先評価化学物質 (法第2条第5項)
毒物及び劇物取締法	劇物 (政令第2条第1項第22号の3) (ギ酸及びこれを含有する製剤。ただし、ギ酸90%以下を含有するものを除く。)
消防法	第4類 引火性液体 第2石油類 水溶性液体指定数量 2,000L (86%以上) 第3石油類 水溶性液体 指定数量 4,000L (78~85%以上)
海洋汚染防止法	有害液体物質 (Y類物質) (施行令別表第1)
船舶安全法	腐食性物質
航空法	腐食性物質
道路法	車両の通行の制限 (施行令第19条の13、(独)日本高速道路保有・債務返済機構公示第12号・別表第2)

16. その他の情報

この安全データシートは、いくつかの安全データシートの情報を参考にしたものですが、すべての資料や文献を調査したわけではないため、情報に漏れがあるかもしれません。また、新しい知見の発表や従来の説の訂正により内容に変更が生じます。重要な決定などにご利用される場合は、別途、資料や文献を調査し検討されるか、試験によって確かめることをお勧めします。なお、物理化学的性質などの数値は保証値ではありません。また、注意事項は、通常の手扱いを想定しており、特殊な取扱いの場合には、別途注意が必要になることをご配慮ください。

< 引用文献 >

- 厚生労働省 職場のあんぜんサイト：モデル SDS 「ギ酸」 2023 年 3 月 31 日改訂版
- 独立行政法人製品評価技術基盤機構：化学物質総合情報提供システム (NITE-CHRIP)
- 独立行政法人製品評価技術基盤機構：政府による GHS 分類結果「ギ酸」、物質 ID：R04-C-053-JNIOOSH, MOE (令和 4 年度分類)
- 独立行政法人製品評価技術基盤機構：NITE 統合版 GHS 分類結果「ギ酸」、物質 ID：m-nite-64-18-6_v2
- 17322 の化学商品 (2022 年版)：化学工業日報社